

## P-050

千葉県予防接種センターでの相談  
内容の推移草野 泰造<sup>1,2)</sup>、森 春輝<sup>1,2)</sup>、  
山本 翔大<sup>1,2)</sup>、星野 直<sup>1,2)</sup><sup>1)</sup>千葉県こども病院 感染症科、<sup>2)</sup>千葉県 予防接種センター

## Take Home Message

海外転入者の予防接種に関する相談割合が増加しており、個別対応の重要性が高まっている

## 【目的】

千葉県こども病院は、千葉県指定の予防接種センターとして、予防接種を行う上で注意が必要な方への接種や、予防接種に関する知識・情報の提供、個別相談を行っている。個別相談は電話を中心に、市町村の職員や医療機関、市民やその家族から寄せられる多彩な内容に対応している。今回、活動内容を振り返る目的で、2018-2024年までの相談内容について検討した。

## 【対象・方法】

2018年1月-2024年12月までの計7年間に当センターに相談された内容について、後方視的に分析・検討した。

## 【結果】

合計923件の相談があり、県内から:686件(74.3%)、県外から:43件(4.7%)、不明:194件(21.0%)であった。相談元は、市町村:546件(59.2%)、市民またはその家族:204件(22.1%)、医療機関:129件(14.0%)、その他・不明:44件(4.8%)であった。

相談内容は、スケジュール:463件(50.2%)、誤接種:136件(14.7%)、ワクチンの適応や効果:99件(10.7%)、副反応:50件(5.4%)、海外渡航:16件(1.7%)、その他・不明:143(15.5%)であった。

相談件数は年ごとに162件→169件→128件→140件→130件→101件→93件で推移し、2019年以降は減少傾向であった。そのうち、海外転入に関わる相談件数は年ごとに29件→20件→18件→18件→20件→18件→23件で推移していた。相談の多くはスケジュールに関するもので、計24ヶ国からの転入者が対象であった。また、全体の相談件数に占める海外転入に関する割合は17.9%→11.8%→14.1%→12.9%→15.4%→17.8%→24.7%と直近3年間で増加傾向であった。

## 【考察】

相談件数全体の減少は、自治体や医療機関での対応力向上や、予防接種に関する情報がインターネットで容易に入手可能になり、保護者が自主的に解決するケースが増加したことが影響している可能性がある。一方、海外転入者の相談割合が増加しており、アジア・北米・ヨーロッパ・南米・オセアニアなど国も多様化している。海外転入者はワクチン内容や接種スケジュールが国ごとに異なるため、接種内容の確認や今後のスケジュール作成など、個別に対応する重要性が高まっている。今後も相談データの蓄積と分析を通じて、効率的な対応体制の改善に取り組んでいく予定である。

## P-051

子どもの予防接種に携わる看護職  
の苦痛緩和への認識と必要なサ  
ポート藤沼小智子<sup>1)</sup>、小島ひで子<sup>2)</sup><sup>1)</sup>東京医科大学 医学部 看護学科、<sup>2)</sup>文京学院大学 保険医療学部 看護学科

背景と目的：予防接種は子どもが初めて経験する痛みのある医療処置であることが多い。乳幼児に痛みのある処置で適切な苦痛緩和がされない場合、針恐怖などの長期的な影響を及ぼすことが示唆されている。保護者は予防接種時に子どもに苦痛があると認識しているものの、苦痛は仕方がないことであり多少の苦痛経験は成長の過程であるにとらえる傾向がある。また、医師・看護職・保護者間での子どもの苦痛の程度も最も低く見積もる傾向があることが指摘されている。本研究では、予防接種に携わる看護職の子どもの苦痛緩和への認識と実践のための必要なサポートを明らかにすることを目的とする。研究方法：東京都23区内の小児科を標榜する定期予防接種受け入れ医療施設の看護職を対象とし質問紙調査を2020年8～11月に実施した。予防接種を受ける子どもへの苦痛緩和に関する意見、苦痛緩和を実践するために必要なサポートを自由に記述してもらった。質的データ分析ソフトMAXQDA2020を用いてコーディングによりキーワードを抽出し予防接種時の苦痛への認識に焦点を当ててカテゴリー化した。倫理的配慮：対象の施設長に同意を得た上で、研究説明文書、質問紙票を郵送した。質問紙への回答と返送をもって同意とみなすこと、個人情報取り扱い、データ保管及び廃棄、対象者への結果の公表方法を明記した。所属の研究倫理審査委員会の承認を得た。結果・考察：予防接種への考えについて146名の回答があった。＜子どもの気持ちを心配する＞＜子どもと親の不安を軽減したい＞など子どもの心理面への影響を考慮しており、＜積極的に苦痛緩和したい＞という認識があった。一方で＜予防接種は苦痛を伴うものである＞＜苦痛は一時的で大したことない＞と痛みがあることは当然であるという認識があり、＜鎮痛剤を使用することに疑問がある＞＜苦痛緩和の効果があるのか疑問＞や＜接種を素早く終わらせる＞であった。保護者と同様に予防接種に携わる看護職にも予防接種時の苦痛を過小評価する認識があることが明らかとなった。予防接種時の苦痛緩和に必要なサポートについては148名の回答があった。＜苦痛緩和・方法の知識提供の機会＞や＜エビデンスのある苦痛緩和情報＞＜限られた時間内で子どもや親に対応できる時間＞＜苦痛緩和できる診察室環境＞などが挙げられた。結論：予防接種に携わる看護職への知識提供と各職場内でのサポートが必要である。